The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シュトルムのノヴェレ『シュターツホーフにて』：アンネ・レーネとマルクスを隔てるもの
Author(s)	山城, 貴茂
Citation	独文学報. 1998, 14, p. 91-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シュトルムのノヴェレ『シュターツホーフにて』

——アンネ・レーネとマルクスを隔てるもの——

山　城　貴　茂

シュトルム（Theodor Storm）は、1817年、ドイツ北辺の町フーズムに生まれ、1888年、同地の聖ユルゲン墓地に埋葬された。彼は、終生、この故郷を愛し続けた。この「灰色の海辺」の町に対する彼の思いは、この地方が帰属をめぐってデンマークとプロイセン・ドイツとの間で揺れ続け、そのために彼自身もまた深く苦悩することとなったが故に、一層深いものとなった。彼の生み出した作品の中で、フーズム、或いはシュレスヴィヒ・ホルシュタインは頻繁に舞台として登場するが、本稿が扱うノヴェレ『シュターツホーフにて』*Auf dem Staatshof* は、この作家が自分の故郷を小説の中に本格的に描いた最初のものであった。このノヴェレを彼は、1859年、故郷を遠く離れたハイリゲンシュタットの町にあって発表する。

I

> 私は個々のことを、ただ何が起こったかを申し上げることが出来るに過ぎません。どうして起こったのかは申せません。それが如何に結末を迎えたのか、また、その結末をもたらせたものが人の行いであったのか、それともただの偶然だったのか、それも私には分からないのです。しかし、雫が滴るように思い出が私の胸に浮かぶのですから、私もそのようにお話してみましょう。（I. 392）

この作品はこのような語り手の言葉によって始まる。そして、この言葉通りに語り手マルクスは、淡々と、幼年期から青年期にかけて交流のあったある一人の女性にまつわる自らの回想を紡いでゆくことになる。彼の回想の独白という形式をこのノヴェレはとっているのである。

舞台となるのは、シュレスヴィヒ・ホルシュタインのアイダーシュテット半島にある大農場シュターツホーフ。これは、かつて栄えた一族ファン・デル・ローデン家のものであった。この一族は、昔こそ幾つもの農場を抱え、栄華を極めたのだが、しかし今では既に衰退の道を辿り、残る資産はシュターツホーフのみとなっていた。しかも、一門の血脈を受け継ぐのは、年老いたファン・デル・ローデン夫人とその孫娘アンネ・レーネのみで、男は一人も残っていない。マルクスは、父がこの老夫人の仕事上の援助者であったために、幼少の頃よりこの一族と、とりわけ歳の近いアンネ・レーネと親しくなったのであった。

老齢故の不便を感ずるようになったファン・デル・ローデン老夫人は孫娘を引き連れて、マルクスの住む町へ移ってくる。これ以降、両家はますます親しく付き合うようになってゆく。やがて、老夫人が他界すると、マルクスの父がアンネ・レーネの後見人となり、彼女はマルクスらとともに暮らすこととなる。

年月は流れ、マルクスは大学へ行くために故郷を離れる。彼は大学町に身を置きながら、父からの手紙でアンネ・レーネがさる青年貴族と婚約したことを知る。しかしながら、学位取得の後、帰郷すると、アンネ・レーネの婚約は破綻したらしいと聞かされる。原因は、地価下落によってシュターツホーフの資産価値が大幅に低下してアンネ・レーネの零落が止めようもなくなったことにあった。青年貴族は、彼女の零落を知るや、彼女を見捨てたのである。更に悪いことに、アンネ・レーネ自身も病気がちとなってしまっている。静養のためシュターツホーフに戻っている彼女を、マルクスは帰郷のその日に訪れる。このとき、彼女は彼に、婚約者のことは忘れ、前向きに生きてゆくことを約束する。

ある日、町に住む若者たちがシュターツホーフへの遠出に出かけることとなる。マルクスも含めた、その若者たちの中心となるのは、金持ちのビール醸造業者の息子クラウス・ペーテルスであった。彼の父親はシュターツホーフを息子に買い取ってやるつもりなのだと噂されていた。一行は、日が没すると、館の広間で舞踏に興ずることとなる。マルクスも、踊りの列に加わり、アンネ・レーネとともに踊る。舞踏が休憩に入ったとき、二人は広間を抜け出し、庭に出る。そして、歩いているうちに、彼らは水上に建てられた古びた四阿へと至る。アンネ・レーネは、マルクスの制止も聞

かずにこの四阿へと踏み入り、その古くなった床板を踏み抜いて溺死するのである。語り手は、最後に、シュターツホーフがクラウス・ペーテルスの所有に帰したことを述べて、報告を終わる。

この作品は、ごく短いものではあるが、しかし、シュトルムの創作活動の歴史の中では重要な位置を占めている。シュトルムの評伝の作者シュトゥッケルト（Franz Stuckert）は、シュトルムがその初期創作期の主観的、感傷的に過ぎる傾向[1] を克服した証をこのノヴェレに見出し、これを「奇跡」（ein Wunder）に譬えてさえいる。のみならず、幾らかの留保をつけながらも、これをシュトルム晩年における円熟期の作品群を先取りするものであるとも述べている。[2]

おそらく、この作品において最も注目される点は、一人称の語り手の導入、及び、具体的な描写の二点であろう。ローマイアー（Dieter Lohmeier）は、前者を高く評価するとともに[3]、後者に関しても考察を行い、幾つかの根拠からこのノヴェレの背景となっている時代が1840年代であろうと推測している。[4] 実際、この作品には時代や地域をにおわせる様々な小道具が散りばめられているのである。確かに、このノヴェレの題材について、シュトルム自身は、彼が偶然目にしたアイダーシュテットの古びて荒れ果てたまま立ち尽くしていた屋敷と、フリードリヒシュタットに暮らしていた名家の末裔の女性の逸話のみを現実の素材としたに過ぎず、その他のものは全て純粋な創作であると言っている。[5] しかし、ほとんどが純粋な空想によって生み出されたとするには、作品全体にわたってあまりにも描写が具体的であるとの感は否めない。『水に沈む』*Aquis submersus* や『レナーテ』*Renate*、『エーケンホーフ』*Eekenhof* などといった、後の一連の歴史的ノヴェレについての研究の中で、ヴァンソン（Hartmut Vinçon）は、「[……] 既に『シュターツホーフにて』を書くためには、18世紀文化史の詳細な研究が必要であった」[6] と述べている。シュトルムは決して空想に筆を委ねたのではなく、むしろ18世紀以来の歴史的事実、地方習俗の研究などの万全の準備をもって執筆したと考える方が妥当であろう。それ故に、後期作品に比べればまだ粗さは否めないものの、彼は存在感のある物語世界を読者の前に提示することが出来たのである。また、同じ理由から、このノヴェレにおける社会・時代批判の要素は自ずから際立ち、力を持ったとも言うことが出来よう。

II

マルクスという人物はこのノヴェレにおいて二つの役割を担っている。すなわち、まず物語の語り手、そして彼の語る物語の中の登場人物である。前者については、先にも挙げたローマイアーの考察に詳しい。そこで、ここでは後者について論じてみたい。

マルクスは、おそらくはアンネ・レーネにとって最も近い立場にある人間であったと言えよう。ファン・デル・ローデン老夫人の死後、アンネ・レーネはマルクスの家に引き取られ、彼らは兄妹も同然に育っているからである。更に、マルクス自身、「少年時代以来、私の中に芽吹き始めていたアンネ・レーネへの思い」(I. 408f.) と述べていることからも分かるように、彼は彼女に恋慕の情を抱いてもいるのである。しかるに、彼は彼女に対して常に距離を置いた態度を取り続けている。もちろん、それは彼が「語り手」であるが故の創作上の要請に起因するものでもあろう。しかし、彼のそのような静観的態度に、作品内容に即した動機づけがなされていると考えることも、強ち的外れであるとは言えないのではなかろうか。このような仮定の下、以下において、二人の間に存在し、それ故にマルクスをアンネ・レーネから隔てていると思われる要素を取り上げて考察してみよう。

マルクスがアンネ・レーネに対して距離を取る、或いは取らねばならない理由としてまず考えられるのが、彼らの間に横たわる階層の差異である。マルクスの父が実際にはいかなる職を有していたのか、そのことについて、あまり具体的なことは作品中には記されてはいない。しかし、母親に関しては、「私の市民らしく倹約家の母 (meine bürgerlich sparsame Mutter)」(I. 405) という記述が見られる。マルクス自身について言えば、彼が市民階層の出身者であり、かつ、そこに属していることは比較的容易に見て取ることが出来よう。彼は、アンネ・レーネの婚約者である青年貴族の態度について、「私はこの侍従殿によって青二才の市井人 (ein junger bürgerlicher Mensch) として扱われていました」(I. 408) と不快の念を表明している。また、彼は大学に薬学を学び、おそらくは、その知識、技能を要する職業に就くこととなると思われる。というのも、アンネ・レーネが四阿で溺死した際、彼は医者を呼びに町へ向かうが、その説明のため

に、「このような場面では私の未熟な技術は信用ならなかった」(I. 426) からだと彼自身が述べているからである。これらの事柄から、彼が市民階層に、更にあえて言うならば、教養市民階層に属していると見なすことが可能であろう。[7]

一方において、アンネ・レーネは、この地域一帯に大きな勢力を誇った貴族ファン・デル・ローデン家の末裔である。確かに、今でこそ衰退の一途を辿るこの一門であるが、この家からは「ここ二世紀の間に、この地方の会計監査官や参事会員、そして私の町の市長などが次々と誕生」(I. 393) したのであった。また、「九十の屋敷を持ち、その傲慢から、それを百にしてやろうと挑んだと言われ」(I. 393) るほどに栄えたのも、この一族であった。このような事実のほかにも、「貴族的贅沢でもって (mit patrizischen Luxus)」(I. 393) や「貴族の出自に相応しいあらゆる荘厳さをもって (mit aller Feierlichkeit patrizischen Herkommens)」(I. 401) などという言葉からも、ファン・デル・ローデン家が古い家柄の貴族であることが推定される。

さて、マルクス、アンネ・レーネ双方の社会的に属すべき階層を明確にした上で、実際に二人の間にある階層の壁をマルクスはどのような形で見ているのか、それを具体的に見てゆきたい。

マルクスの回想は、彼が両親とともにシュターツホーフを訪れた記憶に始まる。当時の彼は4歳であった。そこには、彼とアンネ・レーネの二人が、ヴィープという名の老女の給仕で、子供だけで食事を取る場面がある。ヴィープはファン・デル・ローデン家に仕える忠実な農婦である。食事が終わったところでデザートが運ばれて来る。

> [……] というのも、ヴィープがさらにデザートとして、タルトの上にのっている鳩をかたどった砂糖菓子を切り分けてくれたからです。ただ、全く公平に分けられたというふうには思われません。アンネ・レーネはいつも、尾や頸など [見映えのするところばかり] をもらっていたのですから。(I. 395)

ヴィープがマルクスに対して悪意を抱いているというわけでは決してない。彼女はマルクスに対しても一貫して好意的であるし、また、後年に至って

は彼に深い信頼を寄せてもいる。しかし、それでも、重んじられて然るべき客人の子であるマルクスより、彼女はアンネ・レーネを優遇する。二人の扱いの相違は、ヴィープのアンネ・レーネへの深い愛情から生じた結果であるのかもしれない。しかし、マルクスは次第に、自分とアンネ・レーネとの間に身分上の差があることを感じ始める。

ファン・デル・ローデン老夫人及びアンネ・レーネが後に町に移り住むことになると、彼女らは日曜日にはマルクスの家に招待されて一緒にコーヒーを楽しむことを習慣とするようになった。このコーヒーの席においても、マルクスはアンネ・レーネとの差というものを痛感せざるを得ない。ただし、それは以前のような第三者を媒介とした自分たちの扱われ方の違いといったものではない。そこに現れるのは、彼ら自身の素養の違い、言い換えれば育ちの違いである。両家がともにコーヒーを楽しんでいた日々を思い返して、語り手は次のように述べる。

> これら日曜日の午後のことを思い出しますと、しかし、私は、自分のコーヒーをカップから受け皿に移そうとしているときほど惨めだったことはないのではないかと思われます。私は今なお、あの老婦人が自分の席から送って寄越した厳しい眼差しを感じるほどです。一方の母はというと、私に私の小さな幼友達［アンネ・レーネ］を模範として推奨する始末でした。アンネ・レーネが、コーヒーを飲んでいるときに、かつてナプキンや彼女の白い服に染みを作ったなどということは、私の記憶には全くなかったのですから。（I. 397f.）

コーヒーをカップから受け皿に移すというのは、コーヒーを冷ますための作法である。当時、息を吹きかけることは下品とされていたのである。コーヒーを冷ますという行為、ただそれだけのことの中に、上手くゆかずに四苦八苦するマルクスと幼いながらも全き貴族の洗練を身につけてそつなくこなすアンネ・レーネが見事な対照をなしている。そして、ここには、彼女の貴族的洗練が現れているのみならず、彼女とマルクスの育ちの違いが現れている。その違いとは、結局、彼らの所属する社会的階層の相違に還元することが出来るであろう。このような形で既に幼い段階で、マルクスには、彼とアンネ・レーネの間の身分・階層の違いというものへの意識が

芽生えていたと考えることが出来る。マルクスも、もちろん貴族たちの上流社会の洗練と全く無縁というわけではない。アンネ・レーネとメヌエットを踊っているという事実などは、その証明であろう。ところが、やはりアンネ・レーネの持つ完全とも呼べそうな洗練の前では、自分と彼女の差を認識せざるを得ない。成長した後も彼は自分が市民階層に属することを常に意識し、結局、自分に対する青年貴族の横柄な態度も、この酷薄な青年貴族に対するアンネ・レーネの少なからぬ好意も、そして、この二人の婚約も是認せざるを得ないのである。

この階層意識が、結果として、アンネ・レーネに対するマルクスの距離を置いたような態度を決定する一つの要因であったのではないだろうか。だからこそ、彼がアンネ・レーネを求めて空しくも手を差し伸べるのは、クラウス・ペーテルス率いる若者の一団がシュターツホーフで乱痴気騒ぎを繰り広げる夜になるのだ。すなわち、アンネ・レーネの経済的境遇が抜き差しならぬ状況に置かれていることをヴィープより聞かされ、シュターツホーフがクラウス・ペーテルスの手に落ちる運命にあることを悟った、そのときに、そして、もはやアンネ・レーネがいかなる形においても貴族に相応しい生活を維持し続けることは不可能だと明らかになった、そのときに。

シュースター（Ingrid Schuster）は、アンネ・レーネの滅びは彼女の貴族の伝統への固執、時代への逆行などに起因すると述べ、彼女が強い階層意識に縛られていたことを指摘している。[8] しかしながら、何も階層意識に縛られていたのは、彼女一人ではなかった。マルクスもまた自らの属している階層を常に意識せざるを得ない状況に置かれていたのだ。そして、その階層意識に照らして分相応の立場を守った結果、彼はほぼ一貫して静観的態度を取り続けたのである。

Ⅲ

アンネ・レーネは、マルクスの忠告も聞かずに荒れ果てた四阿に入り込んで溺死する。彼女の死は水によって齎されたのである。そして、この水について、マルクスはこれが何か運命的な力を持っているかのように語っている。

幼少の頃、両親と訪れたシュターツホーフについての回想の中で、彼は、後にアンネ・レーネが溺死することとなる、あの四阿について既に述べている。彼は母親に、皆が集っている四阿に入っておいでと誘われるが、なかなかそこに入って行こうとはしない。

> 私たちも入って来るように呼ばれました。私が逡巡しているので、母は銀色の菓子篭の中から輪っかの形のお菓子を一つ取り出し、それを私に示しました。しかし、私は恐れを抱いておりました。私は、この木造の建物が細い柱に支えられて水の上に建っているのを、既に知っていたのです。でも、結局、目の前に掲げられた餌と、建物の中の壁に描かれた色鮮やかな田園画とが、私に四阿に入って行こうという気を起こさせたのでした。（I. 396）

四阿はまだしっかりと建っているにもかかわらず、幼いマルクスは本能的に、この四阿、及びその下にある水を危険なものと感じているのである。

次に、この死の舞台が物語に登場するのは、ファン・デル・ローデン夫人が死に、アンネ・レーネがマルクスの家に引き取られた後のことである。一緒に暮らすようになったとはいえ、マルクスとアンネ・レーネが接触する機会はそう多くはなかった。それぞれにやらなければならないことが山積しており、また、アンネ・レーネがマルクスたちのやる男の子の遊びに加わりたがらなかったからである。そんな二人の共通の楽しみというのが、日曜日の午後にシュターツホーフへ出かけて行くことであった。彼らは、屋敷の管理を任されているヴィープとその夫マルテンの歓迎を受けた後、館の中や庭を歩き回る。

> ――アンネ・レーネと私は、危険のない迷路の魅力を楽しむために、運を天に任せて、この花の森に好んで入って行ったものでした。庭の隅にある湿っぽい緑亭［Laube］を目指しながら、その代わりにはからずも、今では夏に採れた果実のしばらくの貯蔵に使われている古びた四阿［Pavillon］の前に立っていることがまれではありませんでした。［……］扉を揺すってみましたが無駄でした。老ヴィープによってしっかりと鍵が掛けられていたのです。それというのも、中の床板

が脆くなっていて、あちらこちら床の裂け目から、その下にある水面を見て取ることが出来たからです。（I. 404）

本来、彼らが目指していたのは緑亭であった。しかるに、彼らは四阿に辿り着いてしまうのである。少なからず繰り返されるこの事態に、マルクスは運命的な力を感じていたのであろう。あたかも、この四阿が、否、その下で静かに犠牲者を待ち受ける水面が、彼らをここに引き寄せていたかのようであった。幸い、この段階では四阿には鍵が掛けられており、彼らは中に踏み入ることが出来ない。しかし、その床の穴から覗く水面は、明らかにそこに潜む危険性を暗示している。

四阿が最後に登場するのは、マルクスとアンネ・レーネが舞踏の輪から抜け出してきたときである。このときほど、アンネ・レーネを捉えている運命的な力が如実に現れたことはあるまい。

暖かい夏の夜である。舞踏の休憩の間に館を出た二人は、少年時代、迷路を楽しんでいたときと同じように、林の中を歩く。静かで心地よい空間がそこには広がっている。ところが、この快い夜に海鳥の鋭い鳴き声が闖入する。その鳴き声に聴覚を刺激されたマルクスは、突然に海の音を聞く。

一旦、研ぎ澄まされた私の耳は、ここに至って、遠く響く波濤の砕ける音をも聞き取ることになってしまいました。あの波濤は、澄み切った夜、沖の寂莫とした、神秘に満ちた深淵の上に転がり、寄せ来る潮に運ばれて岸辺へと打ち付けられているのでした。寂寥感、孤独感が私を襲いました。ほとんど無意識のうちに私はアンネ・レーネの名を口にし、そして、両腕を彼女の方へと伸ばしておりました。

「マルクス、どうしたの？」彼女は大きな声で言って、振り返りました。「私ならここにいるわよ！」

「何でもないんだ、アンネ・レーネ」私は言いました。「だけど、君の手を握らせてくれないかい。僕は海のことなんてずっと忘れてたのに、今、突然にその海の音が聞こえてきたんだ！」

庭の古びた四阿の前には少し開けた場所があり、そこに私たちは立っていました。四阿の扉は開いており、壊れた蝶番でぶら下がっておりました。（I. 423）

ここに海が現れる。海はシュトルム文学において重要な死のモチーフである。[9] マルクスは、この海の音に寂寥感、孤独感を感じ取り、アンネ・レーネに向かって手を伸ばす。すなわち、この海の音は彼女の死を彼に予め告げ知らせることになったのだ。いわば、彼はこの海の轟きに、アンネ・レーネを捉えている運命の囁きを聞き取ったのである。そして、その直後、二人は、再び超自然的な力に誘われたかのように、あの不気味に佇む四阿の前に立っていた。

そしてまた、アンネ・レーネの死に、運命的な、或いは超自然的な力の関与を認めざるを得ないようにしているのは、その一族の過去の悲劇である。ファン・デル・ローデン家の最後の嫡男の死について、語り手は次のように報告している。

> 最後の嫡男は十五歳の折、非業の死を遂げたのです。隣の農場主のフェンネで彼は馬勒や端綱なしに当歳の子馬に乗ろうとしたのですが、その際、この臆病な獣から水飲み場の穴に滑り落ち、溺死してしまったのでした。（I. 393）

溺死をしたのはアンネ・レーネだけではなかった。水は、アンネ・レーネのみならず、この一門の歴史に死の影を落としているのである。

このように見てくると、アンネ・レーネが常に運命的な力に支配されていたと言えるのではないか。その力は、女乞食が彼女に仄めかす幽霊や化け物[10]とまでは言わずとも、やはり、超自然的なものである。そして、この力に捉えられているアンネ・レーネは、いわば生の領域たる此岸からは隔たった存在のように思われるのである。このことが、マルクス自身の意志とは関係なく、彼を彼女から引き離しているのではないだろうか。

IV

以上のような観察から、このノヴェレのクライマックス、すなわち、アンネ・レーネの死の場面は、極めて多層的な意味を担わされて読者に提示されていることがより明らかとなろう。マルクスの言うことも聞かずに四阿に踏み入ったアンネ・レーネ。彼女は、四阿の中の色褪せた田園画を眺

めて、しばらくは、かつての幸せだった時代を懐かしむ。そして、その頃に比して現在を嘆く。マルクスは、館へ戻ろうと言うが、アンネ・レーネは彼の言葉に耳を貸さない。

> 彼女は私の言うことを聞いてはくれませんでした。腕を服の上に垂らし、彼女は徐に口を開きました。
> 「あの人はそんなに間違ってはいなかったのよ。——誰がこんな家の娘を受け入れてくれるというの！」
> 私は自分の目に涙が湧き上がるのを感じました。
> 「ああ、アンネ・レーネ」私は叫んで、四阿へと繋がる階段に足をかけました。「僕が——僕が君を受け入れよう！ さあ、手を貸して、僕はこの世界に戻る道を知っているのだから！」
> しかし、アンネ・レーネは身を屈めると、私に向かってその腕で強い拒絶の仕草を見せました。
> 「いけない」彼女は叫びましたが、その声には死の不安が潜んでおりました。「あなたは駄目よ、マルクス。来ないで！ 私たち二人が乗ったらもたないわ」（I. 424f.）

この後、一瞬の間を置いて床板の一枚が割れ、アンネ・レーネは水死するのである。

アンネ・レーネは、ここで、かつて自分を捨てたあの青年貴族が必ずしも一方的に非難されるべきものではなかったことを述べている。あの婚約がそもそも二つの名門の生き残りをかけた結びつきであったことを思えば、彼がアンネ・レーネを捨てることも理に適ったことであった。彼もみすみす、零落し財産も失ったような娘を娶り、自らと自らの一門を危機に陥れるわけにはゆかなかったのである。

アンネ・レーネの言葉を聞いて初めて、マルクスは彼女に対して積極的な行動に出る。「僕が君を受け入れよう」と、彼はまさに求婚の言葉を口にするのである。四阿に着くまでは、彼はこの望みを口にすることに躊躇いを感じていたのだが、今こそ、その好機が訪れたのである。先にも述べたように、マルクスはこの日、既にヴィープの口からアンネ・レーネの経済的窮乏を聞かされている。そして、屋敷が売りに出され、クラウス・ペー

テルスがこれを手に入れるであろうことも。皮肉にも、マルクスにとっては、このような状況にあって初めて、彼とアンネ・レーネの間にある社会的階層の壁が崩れることになったのであった。そして、更に今、アンネ・レーネ自身の口から、彼女が既にあの青年貴族に相応しい社会的立場を喪失していることを聞いたのである。マルクスは、この瞬間を捉え、彼女に手を差し伸べたのであった。

ところが、マルクスがアンネ・レーネに呼びかけるこの言葉は、ただ単なる求婚の言葉にとどまるものとは言えまい。彼は続いて、自分は「この世界へ戻る道」を知っていると言う。この言葉は、彼が「アンネ・レーネに、再びこの世界に目を向け、過去の影の中に生きることを止めるように頼む」(I. 422) つもりであったことを考えると、一つには、彼が彼女に市民階層への同化の道を指し示すことが出来るの謂を持つことになろう。しかし、今ここで彼が彼女に手を差し出すように言うのは、彼女がいる四阿の脆さのため、そして、それ故に差し迫った事故の危険を察したがためでもある。そして、それはマルクスにとっては、起こるかもしれぬという蓋然性の問題ではない。彼方に不気味に轟く海が彼に告げ知らせたはずのアンネ・レーネの死の予感、それが彼を捉えている。今、彼女は、彼が幼い日より恐れていたあの四阿に立っているのだ。そして、足元には水がある。アンネ・レーネを、そしてファン・デル・ローデン家を滅ぼそうとする運命的な力、それが彼女にまさに手を下そうとしているのだ。マルクスがアンネ・レーネに手を差し伸べるのは、すなわち、彼女をこの運命的な力から救い出そうとする試みに他ならない。それ故、「この世界へ戻る道」とは、この運命的な力の支配する領域からこの此岸の世界へ戻る道のことでもあるのだ。

マルクスはこの瞬間に、アンネ・レーネへの求婚、そして運命的な力からの彼女の救出を試みた。それらはともに、これまで彼と彼女の間を隔ててきた大きな壁の超克の試みでもあった。しかしながら、そのいずれもがやはり同じ瞬間に挫折する。アンネ・レーネ自身が、彼の差し出した手を拒絶したのだ。かくして、彼女は「この世界」に戻ることなく、水に沈む。

V

以上、マルクスのアンネ・レーネに対する静観的態度、或いは彼らの間にある、ある種の距離感といったものを手がかりとして、このノヴェレを考察してきた。このマルクスという人物は、物語の語り手であり、観察者であるということのみを理由として、アンネ・レーネの人生に介入しないのではない。二人の間にある社会的階層の格差が彼の行動を束縛しているのであり、また、アンネ・レーネを捉えている運命的な力というものも、彼らを隔てる大きな要因となっているのである。そして、この二つは、物語の頂点において見事に絡まりあい、強い印象を読者に与える。

しかし、以上のような二つの要素を孕むマルクスとアンネ・レーネの距離感は、そのまま、このノヴェレの性格とも符合することとなろう。この作品は、確かに、旧来の貴族が没落し、新たな市民階層が力を持つようになり始めた時代の変転期を描いた、いわば社会小説の性格を強く帯びている。しかしながら、同時に、極めて鮮やかに抗い難く作用する不気味な運命的な力をも描き切っている。これら、社会的要素と運命的要素がともに、お互いの間の均衡を保ちながら大きな二本の柱を形作り、作品そのものを支えているのである。その意味で、このノヴェレは、シュトルムらしいバランスの取れた典型的な作品と見なすことが出来よう。それ故、この作品を前にするとき、上記の二つの要素のうちのいずれかのみに注意を払い、他方を看過するなどということは慎まねばなるまい。ノヴェレの冒頭においてマルクスは、アンネ・レーネの滅びの背後で真に作用した力が何であったのか自分には分からないと告白している。この語り手に倣い、我々もまた、そのように彼の物語に耳を傾けるべきであろう。

テキスト

シュトルムのテキストは以下のものを用い、引用個所については引用文の直後の括弧内に巻数とページ数を記した。

Theodor Storm: *Sämtliche Werke in vier Bänden.* Hrsg. von Karl Ernst Laage und Dieter Lohmeier. Frankfurt am Main 1987-88.

注

1 シュトゥッケルトもローマイアーも、シュトルムが主観性の中に自らを失う危険を冒しているのだという、『アンゲーリカ』*Angelika* に対するクーグラー（Franz Kugler）の批判を引いて、シュトルムの初期作品に見られる過度の主観性、感傷性を問題視している。

Vgl. Franz Stuckert: *Theodor Storm. Sein Leben und seine Welt.* Bremen 1955, S. 257f.

Vgl. Dieter Lohmeier: *Erzählprobleme des Poetischen Realismus. Am Beispiel von Storms Novelle „Auf dem Staatshof".* In Klaus-Detlev Müller (Hrsg.): *Bürgerlicher Realismus: Grundlagen und Interpretationen.* Königstein 1981, S. 169f.

2 Vgl. Stuckert: a. a. O., S. 259ff.

3 ローマイアーは、このノヴェレにおける一人称の語り手の導入が、主観と客観、Poesie と Prosa の融和という、いわば詩的写実主義の重大な課題に大きな成果を上げていると指摘する。

Vgl. Lohmeier: a. a. O., S. 168ff.

4 Vgl. Ebd., S. 163f.

5 Vgl. Theodor Storm: *Sämtliche Werke in vier Bänden.* Hrsg. von Dieter Lohmeier. Frankfurt am Main 1987, Bd. 1. S. 1077.

6 Hartmut Vinçon: *Theodor Storm mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten.* Reinbek 1972, S. 129.

7 野田宣雄氏は、留保を前提とした上で「教養市民」の大雑把な定義をまず提示しているが、その第1に次のようにある。「教養市民層の第一の特徴は大学教育を受けていることである。職業でいえば、次のものが教養市民に数えられる。ひとつには、大学教授・ギムナジウム教師・裁判官・高級行政官僚・プロテスタント聖職者をふくむ広義の高級官僚、いまひとつには、医師・弁護士・著作家・芸術家・ジャーナリスト・編集者等の自由職業。」（野田宣雄 『教養市民の歴史』 講談社学術文庫　平成9年　14ページ）

8 Vgl. Ingrid Schuster: *Theodor Storm. Zeitkritische Dimension der Novellen.* Bonn 1971; 2. Aufl. 1985, S. 85.

9 海が死のモチーフとして印象的に機能している代表的な作品としては、『水に

沈む』、『後見人カルステン』*Carsten Curator*、『白馬の騎手』*Der Schimmelreiter* などが挙げられる。

10 大学町に出立する前に、アンネ・レーネと連れ立ってマルクスはシュターツホーフへ赴くが、そこで言い争っているヴィーブと女乞食に出くわす。ファン・デル・ローデン参事会員に母親の遺産を奪われたと主張する彼女は、謎めいた言葉を吐く。「私は金輪際、あんたのところの納屋の二階でなんて寝たりしないわよ。あんたらの住んでる家には、夜中に何かがうろついてモルタルを継ぎ目から剥がして回っているんだよ。あの高慢な婆も一緒にいればよかったのに。そうすれば、あんたらみんな揃って報いを受けることになっただろうにね！」(I. 407)

Zu Storms Novelle *Auf dem Staatshof*

— Anne Lenes Gestalt für Marx —

Takashige YAMASHIRO

In dieser Novelle (1859) hat Storm verschiedene neue Versuche gewagt. Zum Beispiel führt er bewußt einen Ich-Erzähler in die Novelle ein und beschreibt hier genauer als je Landschaften, historische Verhältnisse oder lokale Sitten und Bräuche. Die zentrale Handlung der Novelle ist der Untergang des Mädchens, Anne Lene, das aus einer patrizischen Familie stammt. Marx als Ich-Erzähler erzählt aus seiner Erinnerung den tragischen Vorgang ihres Untergangs.

Dabei spielt er nicht nur eine Rolle des Erzählers, sondern erscheint selber in seiner Erzählung als eine der Hauptpersonen, die der Anne Lene nahestehen. Aber trotz seiner starken Neigung zu ihr bleibt er doch durchaus von ihrem Schicksal distanziert. Woher kommt denn seine distanzierte Haltung gegenüber Anne Lene?

Erstens müssen wir daran denken, daß Anne Lene zu einem höheren gesellschaftlichen Stand gehört als Marx. Auch wenn sie als elternloses Kind mit ihm einen gemeinsamen bürgerlichen Lebenskreis teilt, gibt es zwischen ihnen doch einen unüberbrückbaren traditionellen Standesunterschied. Und zweitens kann man in dieser Novelle hier und dort Einflüsse der übernatürlichen Kraft bemerken, die sich vor allem im Wasser symbolisiert. Und im Bewußtsein von Marx spiegelt sich nicht nur diese Kraft, die Anne Lene zum Tode und Verderben gebracht hat, als unirdisch wider, sondern auch Anne Lene selbst scheint ihm ein überirdisches Wesen zu sein. Darum kann er eine Kluft zwischen ihnen nicht überwinden.

Diese beiden, sozialen und seelischen, Umstände bestimmen seine distanzierte Haltung, die wiederum der Novelle einen eigentümlichen Charakter gibt, daß sie weder bloß Gespensternovelle ist noch eine Gesellschaftsnovelle, in der es sich nur um soziale Konflikte handelt.